

ひたちなか **埋文だより**

61



乳飲み児を抱く埴輪，東京と福岡へ！ 2024年10月から2025年5月にかけて，東京国立博物館 桂甲の武人国宝指定50周年記念と，九州国立博物館 開館20周年記念の特別展「はにわ」に，茨城県指定文化財の「乳飲み児を抱く埴輪」が展示されることになり，事前の調査が行われました。調査では，東京国立博物館の学芸員の方が大きさや埴輪の状態などを観察して，移動や展示する際の注意点などをメモしていました。ひたちなか市埋蔵文化財調査センター所蔵の資料は，毎年いろいろな博物館に貸し出しを行っていますが，一番貸し出しの多いのが「乳飲み児を抱く埴輪」です。今回，初めて本州を離れ，九州のみなさんに見ていただくことになります。（2024年6月）

CONTENTS

調査報告 **ひたちなか市遺跡出土の炭化穀類の年代** （國木田 大）

「私的茨城考古学外史－遺跡・人 出会いと別れ－」 第10回 発掘三昧への道 県内編5 （瓦吹 堅）

新連載開始！ **ひたちなか市の縄文時代1 草創期**横穴墓を歩く② **楊谷寺谷戸横穴墓群** （東 真江）ワンケース・ミュージアム 60 **三反田蜆塚貝塚を探る**遺跡めぐり **貝の遺跡をめぐる旅**ワンケース・ミュージアム 61 **出土した太平洋戦争の爪痕**のぞき見、展示室⑧ **子持勾玉**歴史の小窓⑪ **村長さんの名前は？**

埋文センターの日々 2024年前期

ほか

ひたちなか市遺跡出土の炭化穀類の年代

北海道大学 國木田 大



船窪遺跡出土アワ(上), 武田石高遺跡出土コムギ(下) (S=1mm)

ひたちなか市の遺跡では、様々な時期の炭化穀類が出土しています。これらの炭化穀類の年代は、日本列島における穀物栽培の歴史を考える上で非常に重要になります。今回分析をおこなった成果について『茨城県考古学協会誌』に報告しました。ここでは、その概要について紹介したいと思います。

はじめに

近年、レプリカ法による土器種実圧痕と炭化種実の検討が進み、日本列島における穀物の受容時期に地域差がみられることが明らかになってきた。また、弥生時代の畠作物として評価されてきたコムギやオオムギのムギ類は、¹⁴C年代測定(放射性炭素年代測定)の結果、後世の混入である事例も多い。

ここでは、ひたちなか市鷹ノ巣遺跡、半分山遺跡、船窪遺跡、武田石高遺跡、武田西塙遺跡から出土した炭化穀類を再同定した上で、¹⁴C年代を報告し、関東地方における穀類栽培の定着時期についての検討をおこないたい。

一 対象試料と分析方法

今回分析を行った遺跡は、ひたちなか市の南側を流れる那珂川流域に位置する遺跡である(図1)。

鷹ノ巣遺跡では、第三五号住居跡出土のオオムギ1試料、イネ1試料、第四七号住居跡出土コムギ1試料、オオムギ1試料、イネ1試料、第五五号住居跡出土オオムギ1試料、イネ1試料を分析した。三軒の住居跡には弥生時代後期前半の土器を伴う。

半分山遺跡では、第三二号住居跡出土コムギ1試料を分析した。住居には古墳時代後期の遺物が伴う。船窪遺跡

では、第一号住居跡出土オオムギ1試料、第二八号住居跡出土イネ1試料、キビ1試料(2点)、アワ1試料(3点)を分析した。両住居には平安時代の遺物が伴う。

武田石高遺跡では、第一〇二号住居跡出土コムギ1試料、イネ1試料、第七号住居跡出土オオムギ1試料を分析した。前者は古墳時代中期中葉、後者は古墳時代後期の遺物が伴う。武田西塙遺跡では、第九九A号住居跡出土コムギ1試料、オオムギ1試料、キビ1試料(3点)、第一七四A号住居跡出土オオムギ1試料、コムギ1試料、イネ1試料を分析し



図1 報告遺跡の位置図

た。二軒の住居跡には、平安時代の遺物が伴う。

試料はすべて炭化しており、総数は二一試料である(図2)。オオムギ、コムギ、イネは各1点、キビ、アワは2〜3点で測定を実施している。¹⁴C年代測定における試料調製は、通常の方法にしたがっておこなった。試料の化学処理は筆者がAAA処理までをおこない、炭素精製、グラファイト化、AMS年代測定は、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に依頼した。暦年較正年代の算出には、OxCal v4.4を使用し、較正データにはIntCal20を用いた。試料の出土遺構、帰属時期、炭化種実の同定の詳細については、報告文献をご参照いただきたい。

二 炭化穀類の年代

年代測定結果を図3に示した。鷹ノ巣遺跡第三五号住居出土イネは $1910 \pm 22\text{BP}$ ($81-203\text{calAD}$, 68.3%)、第五五号住居跡出土イネは $1908 \pm 21\text{BP}$ ($82-202\text{calAD}$, 68.3%)であり、両年代値とも弥生時代後期と考えられる。

武田石高遺跡第一〇二号住居跡出土コムギは $1560 \pm 21\text{BP}$ ($437-559\text{calAD}$, 68.3%)、同じく第一〇二号住居跡出土イネは $1614 \pm 21\text{BP}$ ($419-531\text{calAD}$, 68.3%)であり、五世紀代〜六世紀前半の年代であった。遺構の時期と考えられる古墳時代中期中葉と整合的な年代である。

船窪遺跡第一号住居跡出土オオムギは $1219 \pm 21\text{BP}$ ($786-876\text{calAD}$, 68.3%)、第二八号住居跡出土イネは $1252 \pm 21\text{BP}$ ($686-820\text{calAD}$, 68.3%)、同じく第二八号住居跡出土キビは $1261 \pm 21\text{BP}$ ($684-744\text{calAD}$, 68.3%)。アワは $1289 \pm 24\text{BP}$ ($675-771\text{calAD}$, 68.3%)であった。年代値は非常によくそろっており、遺構時期の平安時代と整合的である。

武田西塙遺跡第九A号住居跡出土キビは $1120 \pm 19\text{BP}$ ($893-977\text{calAD}$, 68.3%)、第一七四A号住居跡出土オオムギは $1139 \pm 21\text{BP}$ ($885-973\text{calAD}$, 68.3%)、同じく第一七四A号住居跡出土コムギは $1124 \pm 20\text{BP}$ ($893-975\text{calAD}$, 68.3%)、イネは $1119 \pm 20\text{BP}$ ($893-977\text{calAD}$, 68.3%)であった。船窪遺跡と同様に、遺構時期の平安時代と整合的である。

遺構の時期と矛盾しない年代値が得られる一方で、鷹ノ巣遺跡第三五号住居跡出土オオムギ、第四七号住居跡出土コムギ、オオムギ、イネ、第五五号住居跡出土オオムギ、半分山遺跡第三二号住居跡出土コムギ、武田石高遺跡第七号住居跡出土オオムギ、武田西塙遺跡第九A号住居跡出土コムギ、オオムギの9試料は235〜110BP ($1648-1916\text{calAD}$, 68.3%)の年代範囲であった。一七世紀中頃から近代に相当する年代範囲で、後世の炭化種実が混入したと考えられる。

三 分析結果の評価

¹⁴C年代測定の結果、鷹ノ巣遺跡出土の弥生時代と考えられていたコムギとオオムギは後世の所産であった。また、半分山遺跡、武田石高遺跡、武田西塙遺跡の古墳時代および平安時代以降の試料でも、いくつか後世からの混入が確認された。今回の試料で最も古いコムギの年代は、武田石高遺跡第一〇二号住居跡出土試料の五世紀中葉〜六世紀前葉(古墳時代中期〜後期)、オオムギの年代は、船窪遺跡第一号住居跡出土試料の八世紀後半〜九世紀後半(平安時代前半)になる。

筆者らは、これまで日本列島出土の弥生時代とされるムギ類や雑穀の年代を検討してきた。今回のひたちなか市の資料についても、その年代的な位置づけを確認しておきたい。現状で、最も古いコムギの年代事例は、カラカミ遺跡(長崎県杵岐市)の $1860 \pm 20\text{BP}$ ($91-213\text{calAD}$, 68.3%)で、弥生時代後期の一世紀末〜三世紀初頭の時期になる。弥生時代の年代は、管見の限り、この事例の他に確認されていない。次に古い事例は、庄・蔵本遺跡(徳島県徳島市)のコムギとオオムギで、弥生時代の遺構から検出されたコムギ3試料、オオムギ2試料の年代値が報告されている。コムギ3試料は、 $1640 \pm 20\text{BP}$ 、 $1295 \pm 20\text{BP}$ 、 $1225 \pm 20\text{BP}$ の年代値であり、1試料が五世紀〜六世紀前半頃の古墳時代中期、2試料は七世紀後半〜九世紀代



図2 年代測定を実施した炭化種実

の飛鳥〜平安時代であった。オオムギ2試料も同く、 $1225 \pm 20BP$ 、 $1220 \pm 20BP$ の年代値で、八世紀末〜九世紀の平安時代前半であった。今回の武田石高遺跡第一〇二号住居跡出土のコムギ、船窪遺跡第一号住居跡出土のオオムギも、庄・蔵本遺跡の年代とほぼ同じ年代である。近畿地方では讃良郡条里遺跡（大阪府四条畷市・寝屋川市）と同じ時期であり、近畿地方から関東地方にかけて、古墳時代中期に幅広くコムギが普及していた可能性が高い。一方で、オオムギは、庄・蔵本遺跡や今回の船窪遺跡の平安時代前期を遡る年代は確認されていない。オオムギはコムギより遅れて普及したのかもしれない。ムギ類の年代を簡単にみてみたが、出土事例自体は弥生時代

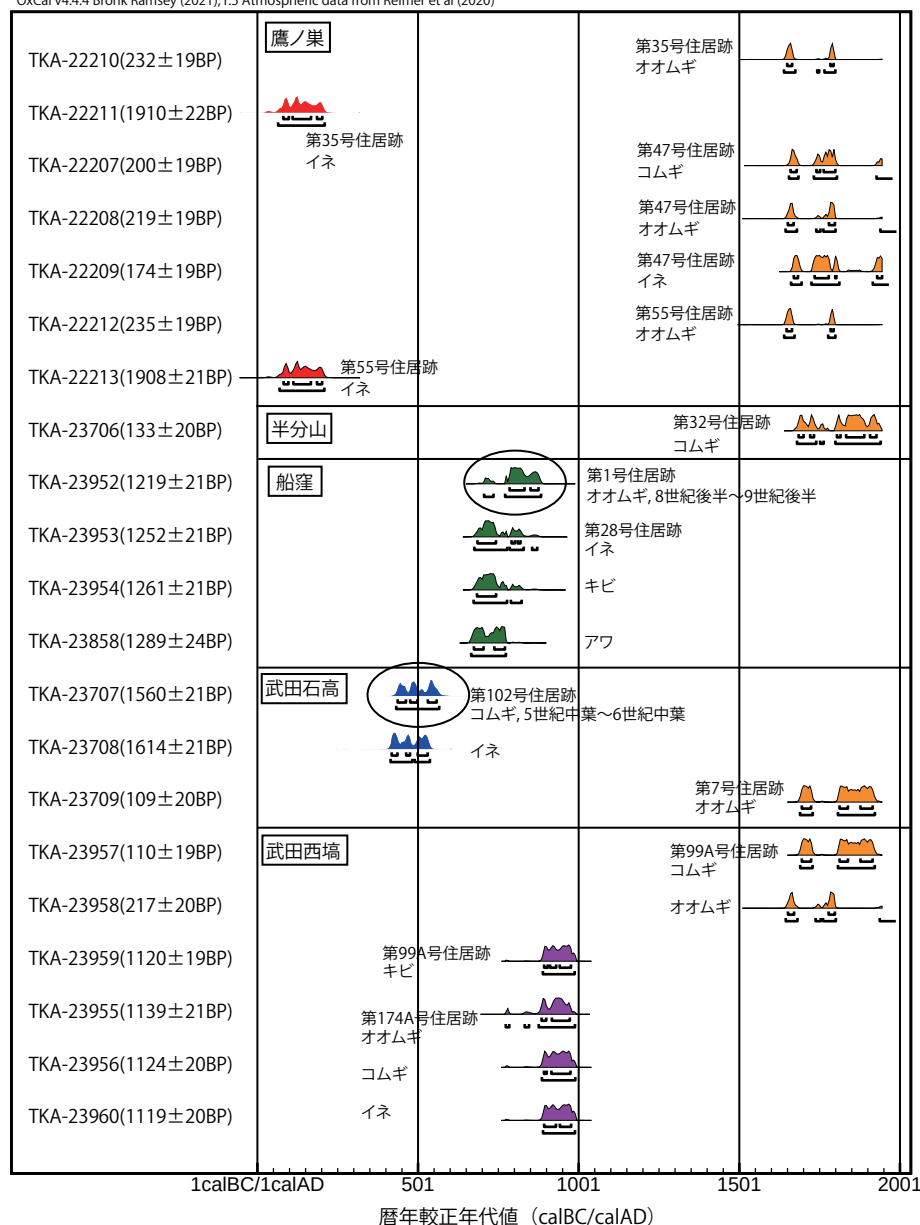


図3 測定試料の暦年較正年代値

早期または前期から、1遺跡1〜数点程度ではあるが、それなりにある。しかし、今回の結果のように、遺構の時期と大きく食い違う事例が散見され、炭化種実を直接年代測定する重要性があらためて認識される。また、鷹ノ巣遺跡や武田西塙遺跡のように、ムギ類は後世の混入で

あっても、イネは想定時期の年代を示す事例が少なくない。筆者らが分析した八幡遺跡（青森県八戸市）第一二号住居跡の事例では、イネ、クリ、トチノキは弥生時代前期の年代であったが、コムギ、オオムギ、アワ、キビ、ヒエは後世の混入であった。前述の庄・蔵本遺跡では土

坑S一〇〇二出土のイネとオオムギは、いずれも第3層から出土した資料であるが、イネは弥生時代期末もしくは中期初頭の年代であるのに対して、オオムギは平安時代という結果になっている。西台後藤田遺跡（東京都板橋区）でも、第一三号住居跡出土の1試料以外は、すべて中世以降の年代であり、鷹ノ巣遺跡と同様の傾向が確認された。この他に、新井三丁目遺跡（東京都中野区）では、大部分の住居跡出土イネが弥生時代後期の年代であるのに対して、Y一〇一〇号住居跡出土のムギ類は中世の年代となっている。関東地方における弥生時代の遺跡では、多量のイネに伴い出土する少量のムギ類や雑穀が、後世の混入であることが多い。また、イネにおいても後世の試料が混ざっていることがあり、年代を議論する際には、必ず¹⁴C年代測定を実施することが必要といえる。同一および類似したコンテキストの土壌を水洗選別した資料であっても、炭化種実の種類によって年代が異なる事実は、今後の穀物利用を考える上でも非常に重要になる。

ちなみにオオムギに関しては、中道遺跡（山梨県韮崎市）出土の縄文時代晩期の土器から圧痕跡が確認されており、同定や土器型式の再検討が待たれる。また、詳細は不明であるが、吹上遺跡（新潟県上越市）出土の弥生時代中期の土器付着炭化物がオオムギと同定とされており、再確認が必要である。コムギに関しても、

上東遺跡（岡山県倉敷市）出土の弥生土器の内面付着物からコムギのDNAが確認されており、分析法も含めて今後慎重に議論する必要がある。

おわりに

本稿では、ひたちなか市遺跡出土の炭化穀類の¹⁴C年代測定を実施した。その結果、武田石高遺跡で古墳時代中期～後期のコムギを確認することができた。鷹ノ巣遺跡や武田西塙遺跡では、ムギ類は後世の混入であったが、イネは想定された弥生時代後期の年代であった。

対象資料の出土状況を検討した結果、覆土や完形ではない土器内から検出した炭化種実が、後世の混入であることが判明した。竈内の灰層や完形の土器内から検出した炭化種実、遺物の年代と矛盾のない年代値が得られた。

炭化種実を直接年代測定する重要性があらためて認識される一方で、資料を正しく同定することも重要である。今回は年代測定のために抽出した穀類のみを再同定したが、一部のオオムギがコムギ、アワーヒエーキビがキビ、アワーヒエがアワもしくはキビに同定されるなど種が変更になった資料が含まれていた。

今後、炭化種実の報告では、詳細な出土状況の記載、正確な同定や対象資料の提示、そして直接の年代測定が望まれる。

*引用・参考文献

- 伊藤茂・安昭炫・伊藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatze・黒沼保子 2017 『徳島大学埋蔵文化財調査室紀要』3, 67-78 / 國木田大・佐々木由香・山下優介・守屋亮・隅田眞・設楽博 2020 『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集』100-101 / 國木田大・佐々木由香・小笠原善範・設楽博 2021 『日本考古学』52, 59-73 / 國木田大・佐々木由香・山下優介・山本華・佐伯博光・米田穰 2023 『日本文化財科学会第40回記念大会研究発表要旨集』46-47 / 後藤直 2011 『講座日本の考古学』9 弥生時代（下）107-155, 青木書店 / 小林謙一・坂本稔・西本豊弘 2009 『吉岐カラカニ遺跡Ⅱ』145-147, 九州大学大学院人文科学研究院 / 設楽博 2023 『東日本穀物栽培開始期の諸問題』雄山閣 / 庄田慎矢・熊谷真彦 2010 『奈良文化財研究所紀要』30-31 / 住田雅和 2009 『新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』106-113, 雄山閣 / 中沢道彦・丑野毅・松谷暁子 2002 『古代』111, 63-83 / 西本豊弘編 2009 『弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—』国立歴史民俗博物館 / 吉田邦夫 2004 『火炎土器の研究』17-36, 同成社

村長さんの名前？

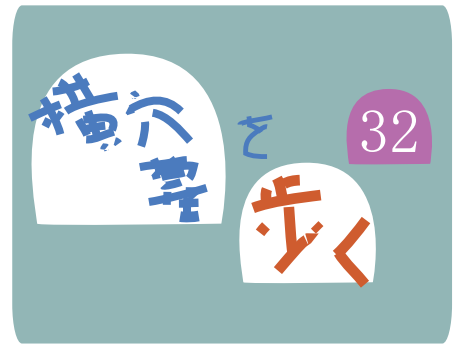
歴史の小窓 その三



赤外線映像

今年のはじめに、神奈川県立博物館で開催していた「華ひらく律令の世界」展で、村々から参集した「市田殿」「吉成殿」「新勾殿」という地域の有力者に酒をふるまったことが記されている居村B遺跡出土4号木簡を見ました。私はその木簡を見ながら、ひたちなか市石高遺跡から出土した、「真新殿」（ましんどの）という墨書土器を思い出していました。「真新殿」は、九世紀前半の集落で最も大きな住居から出土しているもので、有力な家長の名前と考えられます。もしかすると村長だったかもしれません。「真新」の意は、古代銅印にみられる人名の省略の仕方を参考にすると、たとえば「真髪部新麻呂」（まかべのにいまる）のような人名の、ウジ名と名前の一文字ずつを組み合わせた字名とも考えられるのではないのでしょうか。（佐々木義則）

参考文献 押木弘「二〇一五「貞観」紀年銘木簡と伴出土器の様相」『考古論叢神奈河』第二集



神奈川県中郡大磯町
ようこくじやと
楊谷寺谷戸横穴墓群
 (神奈川県指定史跡)

東 真江

(大磯町役場)

大磯町は、神奈川県中央部の南側に位置し、北に連なる大磯丘陵とその丘陵麓から相模湾にまで広がる沖積地からなっています。大磯丘陵は標高一〇〇〜二〇〇メートルの丘陵であり、この丘陵の中に約五〇〇基の横穴墓が確認されています。これらの横穴墓群の一つに神奈川県指定史跡楊谷寺谷戸横穴墓群が三沢川の谷戸奥が大きく西側に入り込んだ最奥部に位置しています。大磯駅から高麗山丘陵上にひろがる通称湘南平(高麗山公園)に向かうハイキングコース沿いにあるので、アクセスも良く、多くの遺跡ファンやハイカーに親しまれている横穴墓群です。

大磯丘陵は、いわゆる基盤として高麗山層群と呼ばれる角礫凝灰岩、泥岩、安山岩の上に大磯層と呼ばれる凝灰質砂岩などからなっており、それらの岩盤は町中でも露出している様子を見ることができます。こうした岩盤からなる丘陵の谷戸内

の斜面に多くの横穴墓が築造されていることが知られています。

楊谷寺谷戸横穴墓群はアクセスの良さから、古くは明治時代から知られており、一九六〇(昭和三五)年神奈川県内で主に活動した考古学者である赤星直忠は神奈川県文化財専門委員として調査を行い、『神奈川県大磯町の横穴 大磯町文化財調査報告書第一冊』にまとめられました。その後、神奈川県立博物館により調査がされましたが、内容は公表されておらず、東海大学による実測調査が『大磯町史二〇 別編考古』に掲載されています。

横穴墓群の概要は、西に湾曲した谷戸の南斜面中腹に三段にわたり二七基が展開しています。横穴墓の構造は大きく三つに区分で、①わずかに玄室と羨道との境部に両袖をとどめる矩形または台形の玄室を呈し、奥壁を最高とするアーチ形天井とするもので、平面における両袖に関連して天井にも段差が認められる横穴墓もあり、①に先行する様相と考えられ、一・二・八・一四号墓の四基が該当します。②玄室と羨道との区分の不明瞭な長台形平面で、奥壁を最高とする明確な



写真1 楊谷寺谷戸横穴墓群



写真2 第11号横穴墓

アーチ形天井を呈すもの。③玄室と羨道との境に天井部をも区分した明確な玄門を造作する構造で、玄室と羨道との区分のない台形平面の奥部に棺室を敷設した構造の棺室横穴墓で、大磯丘陵の横穴墓の中では古手で、特異なものです。①に該当するのは五号墓、③一・一号墓は天井形態が家形を呈しており注目されます。

楊谷寺谷戸横穴墓群は早くから開口していたと考えられますが、三・五、八号墓から計一六個体ほどの土器類が出土しており、七世紀前半から八世紀代にかけての土師器や須恵器瓶、大形広口壺です。

是非、現地を散策したのちに、町内の歴史・民俗・自然を展示する大磯町郷土資料館にお立ち寄りください。お待ちしております。

たびこふんぐん

田彦古墳群では、令和5年6月に実施した試掘調査で隆起線文土器が1点出土しました。この遺跡での草創期の縄文土器の確認は初であり、大変貴重な発見です。



(原寸)

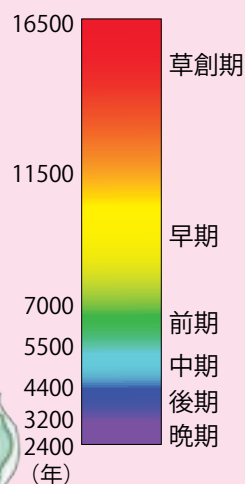
後野遺跡の発掘調査は遺物が集中する地点ごとにA・B地区に分かれ、B地区では旧石器時代の細石刃や礫器、搔器、彫器などが出土しています。出土した資料は、A地区で確認された草創期の無文土器や石器を含めて県指定文化財となっています。

現在遺跡は、後野グラウンドになっており、遺跡の解説看板が設置されているので見学することが可能です。



ちょこつとメモ

縄文時代時期区分

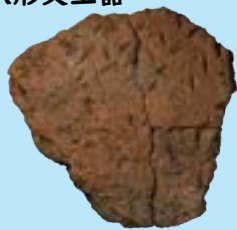


押圧縄文土器



(原寸)

爪形文土器



0 5cm (縮尺1/2)

打製石斧

打製石斧は礫や大型の剥片を打ち欠いて作った石斧で、その中の神子柴型石斧とは、長野県の神子柴遺跡から出土した石器群に由来します。大型で甲が高く重量感を持つのが特徴です。



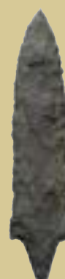
0 10cm (縮尺1/4)

槍先形尖頭器



0 5cm (縮尺1/3)

有茎尖頭器



0 5cm (縮尺1/3)

槍に装着する基部と呼ばれる部分に、茎が付いており、長身で幅が狭いなどの特徴があります。

ひたちなか市の縄文時代 1

そうそうき

草創期(16500 ～ 11500 年前頃)

草創期は、旧石器時代から縄文時代へと移り変わっていく過渡期です。1万5000年前に氷期が終わり気温が急激に上昇し、1万3000年前に一時的な寒の戻りがありましたが、1万1500年前には再び温暖化が進みます。そんな環境の変化の中、長い時間をかけて文化がだんだんと変化していき、旧石器時代には移動生活をしていたのが定住生活に変わり、石器は使用しやすいように加工が施され、土器が出現するようになります。

土器

市内で草創期の遺物が確認されている遺跡は、約15か所存在しており、そのうち7遺跡で土器が確認されています。後野遺跡では、1975年(昭和50)の発掘調査でA地区において日本最古級といわれている無文土器が出土しています。最初出現した土器にはまだ縄文がなく、土器の厚さが薄いのが特徴です。無文土器の次に現れるのが、隆起線文土器と呼ばれるもので、土器の表面に横方向の隆起線が入るのが特徴です。東石川新堀遺跡では1986年度(昭和61)の発掘調査で、25点確認されています。その他に武田原前遺跡、向野B遺跡、原の寺遺跡でも出土しています。次に、爪形文土器というヒトの爪や様々な工具を使って刺突や押圧をし、爪の先の形のような文様を付ける土器が出現します。市内では、畠ノ原遺跡で、ハの字状にみえる文様がついた底部付近の爪形文土器片が出土しています。その後、押圧縄文土器という、縄文原体(文様を付ける縄状の道具)の先端や側面を土器表面に押しつけて文様を付ける土器が出現します。武田原前遺跡では、撚糸の側面を押し付けた押圧縄文土器片が1点出土しています。また、向野A遺跡では、土器が比較的厚い無文土器が28点出土しています。これは、後野遺跡のような最初に出現した無文土器ではなく、草創期の後半に見られる無文土器と考えられています。



後野遺跡 A 地区出土無文土器



東石川新堀遺跡出土隆起線文土器

石器は旧石器時代で使用されていたものが継続して草創期まで使われているものがあり、その一方で新しい形の石器も出現します。後野遺跡ではA地区で、槍の先端に装着して狩猟に使われたとされる槍先形尖頭器や大型の打製石斧、搔く・削る・彫るとい

石器



後野遺跡 A 地区出土石器

った作業に使われたと考えられている搔器・削器・彫器などが出土しています。また差込遺跡では柳の葉のような形をした槍先形尖頭器、武田西堀遺跡では神子柴型の打製石斧が出土しています。草創期の隆起線文土器や爪形文土器の時期にのみみられる有茎尖頭器は、平磯遺跡や泉上遺跡、小谷金遺跡で確認されています。

昭和四五年六月、練馬区立貫井中学校で一年遅れの教育実習を行った。この学校はアパートからも近い中規模校で、実習生は國學院・明治・法政・理科大などからの一〇名ほどで、私は地理を教え部活動は剣道部を担当。実習最終日に私の提案で、寿司屋の二階で打ち上げを実施した。実習後、法政女子から都市対抗野球大会に誘われて観戦、また明治女子とは渋谷道玄坂の散策もした。実習帳を提出のため大学に行くと、正門がバリケードで封鎖されて入れない。常磐松校舎の考古学第一研究室を訪ねると、山田実助手が「実践（女子大）前の道路でさつき革マルと大学の右翼が衝突してたよ。」と教えてくれた。まだ小競り合いは続き、大学周辺にはヘルメットの過激派一団と、戦闘服の右翼一団が駆けずり回っていた。

大学が紛争でロックアウトされた中、七月二五日から九月初旬の間は帰省して高萩市赤浜古墳群の調査に参加した。この遺跡は、斜陽の石炭産業に代わる工業団地造成に伴って実施されたもので、造成地に四基の古墳があり、一基は保存して三基が調査対象。調査団長は茨城キリスト教大学の志田諄一先生、調査担当は諸星政得、川崎純徳先生で、調査には常総台地研究会会員の金子進・鴨志田篤二・三好清隆・渡邊明氏ほか、木砂喜代美君達茨城キリスト教短大史学研究会員生や高萩高校社会クラブ員などが参加。後半には地元の鈴木裕芳君（東洋大）も参加した。最大の松塚古墳（四号墳）は直径40mほどの円墳で、長さ8・25mの複室構

私的茨城考古学外史一遺跡・人 出会いと別れ一

第10回 発掘三昧への道 県内編5 赤浜古墳群・台渡里廃寺跡二次調査



1971年台渡里廃寺跡第2次調査参加者
(高井先生を囲んで)



瓦吹 堅

造の横穴式石室（凝灰岩切石積み）をもち、前室から二体、後室から一体の人骨が確認された。二号墳は盗掘を受けた同様の横穴式石室で、副葬品は多くはなかったが、当地方の支配者一族の奥津城だったと想定された。諸星先生からは主体部の調査について丁寧な教えられ、その後の古墳調査の際に活かされた。四号墳の調査中に、大塚初重・佐藤達夫両先生が来遣。両先生は、我々が耕作放棄された畑から掘ったジャガイモを喜んでお土産に持ち帰ったことを記憶している。この調査は、古墳の調査成果ばかりではなく、茨城県初の旧石器時代の調査となったことも学史上重要で、さらに弥生時代中期後半足洗期の竪穴五基の調査もこの時代の調査として嚆矢であった。旧石器時代の調査のきっかけは、女子大生や女子高生の参加が多いこともあって、調査区外の一部に簡易トイレを設置することとなり、削平されたローム層面を掘り込むと偶然頁岩製のブレードが出土し、これが旧石器調査のきっかけとなった。旧石器時代や弥生時代の調査も加わり、我々は五時起きで朝食も摂らずに徒歩で現場へ通い、朝食のおにぎり弁当は後続の女子大生たちが運ぶという毎日を暫く続けた。四号墳の主体部からは金銅装小大刀などが出土し、七世紀前半の古墳と推定された。しかし、さまざまな問題から概報は出したものの本報告書は未刊行である。発掘当時、鴨志田篤二氏が現夫と沢山のスイカを差し入れに来てくれたことや急に激しい雷雨でテントが飛ばされ、参加者全員



石室天井石（右：4号墳 / 左：2号墳）

が現場から逃げ出したことなどがあつた。

調査後にもご指導を賜った諸星先生は、令和六年八月二六日、八九歳で鬼籍に入られた。これまでの学恩に対し深謝申し上げる。また、調査に参加した渡邊明君も、令和六年四月一二日に七五歳で急逝した。

一月二五日、市ヶ谷の陸上自衛隊駐屯地に憲法改正等を主張して、作家の三島由紀夫（平岡公成）が侵入し、最後に割腹自殺した驚きの事件が起きた。昭和四十六年三月一二日から四月二日には水戸市教育委員会伊東重敏さんの誘いもあって、水戸市台渡里廃寺跡の第二次調査に参加した。この調査には、当遺跡を最初に調査した高井悌三郎先生も

指導に來られ、教え子の京大生五十川伸矢君たちも参加した。高井先生は当時兵庫県西宮市にある辰馬考古資料館館長で、五十川君は甲陽高校の教え子。第一次調査は、南方地区の基壇部を伊東さんと茨城高校生達が調査したという。基壇部の中央からは細かく割れた塔の心礎が確認されたらしく、落雷で破損したのであろうと聞いた。第二次調査では、南方基壇と観音堂山地区の中間部で検出した長方形の住居跡から、堂内の荘厳に使用された埴仏の埴型が出土して注目され、埴仏の工房跡と想定された。また同住居跡から「往生所」と書かれた墨書土器も出土した。台渡里廃寺跡の調査はその後に進められ、第三次は昭和四十七年三月に観音堂山地周辺部で実施し、第四次は昭和四十八年三月に長者山地区で実施された（別号に後述）。これらの調査は、古代那珂郡家の政庁・正倉・郡寺などの位置を確認するために実施された。第二次調査には、担当の伊東さん、高井先生、五十川君のほか山下房子・桜井二郎（國學院大）、飯村正則（東海大）、和田芳枝（茨城大）のほか、鈴木裕芳、黒澤彰哉（天正大）、本多純子（早稲田大）君達が短期で参加した。

この頃、「また逢う日まで」「さらば恋人」「傷だらけの人生」などの流行歌がテレビなどでよく流れていた。



埴仏の埴型
(水戸市教育委員会提供)



2024年3月6日

子どもたちと製作した虎塚古墳への案内看板

貝の遺跡をめぐる旅

in 霞ヶ浦周辺



令和六年五月二三日に、遺跡めぐりを実施しました。今回は、霞ヶ浦周辺の貝に関連する遺跡を訪れました。

最初に向かったのは、縄文時代中期～後期に形成されたハマグリを主体とする大規模な貝塚がある、美浦村の陸平貝塚です。併設する美浦村文化財センターで、職員の方から、陸平貝塚発掘調査についての動画を見せていただいたあと、展示室を見学しました。そして屋外では、佐々木忠二郎と飯島魁が日本人初の遺跡の学術調査を行ったとされる、考古



足を運び、貝塚についての解説を聞き、復元住居を見学しました。

次に訪れたのは、縄文時代後期

～晩期に形成されたヤマトシジミを主体とした貝塚がある、土浦市の上高津貝塚です。考古資料館の展示室にて、出土資料について職員の方に解説していただいたあと、広場にある貝層の剥ぎ取りが展示されている、貝層断面展示室や調査をもとに復元された竪穴住居を見学しました。広場には、縄文時代の衣服に使用されたといわれるカラムシが栽培されており、みなさん興味深く観察していました。

最後に向かったのは、かすみがうら市にある約一三万年前にできたカキ化石の層につくられた、古墳時代後期頃に属する崎浜横穴墓です。横穴墓があるのは、縄文海進によってできた海蝕崖で、目の前には縄文時代には広い内湾であった霞ヶ浦が広がっています。化石層では、カキが生息していた頃の直立した状態のものが観察できます。類例が少ない変わった遺跡を見学し、みなさんとても感動していました。

この日は曇りでしたが、そのおかげで暑さもやわらぎ、遺跡をめぐる歩くには最適な一日となりました。次回は、県外の貝塚にも足を運んでみたいと思います。

(田中美零)



第八回で紹介するのは、武田西塙遺跡から出土した「子持勾玉」です。

体の勾玉に小さな勾玉がたくさんついたような見た目が特徴の勾玉で、主に滑石を用いてつくられています。本体を「親勾玉」、まわりに付く小さな勾玉を「子勾玉」と呼びます。古墳時代中期～後期にかけて祭祀を行う際に使われたもので、「子勾玉」をつけることにより呪力を倍増させたり、呪力の生成の意味を込めてつけられたと考えられています。

武田西塙遺跡の子持勾玉は、大きさが11・7cmあり、上半部の一部が褐色に変色していることから、火にかけられたと考えられています。また、この子持勾玉は別々の場所から見つかっており、下半部は一九九〇年度に調査された第31号住居跡の覆土から、上半部は一九九二年度の調査で第83号ピット（小さな坑）から見つかりました。使用された時代を考えると、割れて分かれた勾玉は、約一五〇〇年ぶりに再会を果たしたことになります。

(田中美零)



1 CASE MUSEUM Vol.60 公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
遺跡めぐり参考展示

三反田蜆塚 貝塚を 探る

日時：2024年5月18日（土）
▶7月7日（日）

休館日 月曜日（休日の場合は翌日）
開館時間 9:00~17:00（入館は16:30まで） 入場無料

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
茨城県ひたちなか市中區3-4-9 TEL: 029-276-8311

今回の展示では、遺跡めぐりの参考展示として、市内最大の貝塚である三反田蜆塚貝塚について、出土した貝類や魚骨を展示し、縄文時代の人々がどのようなものを採集・捕獲し生活していたのかを探る展示を行いました。

遺跡の概要

三反田蜆塚貝塚は、那珂川と中丸川によって両側の壁を浸食されてできた三反田丘陵の東側で中丸川に面した標高約20mの台地上に位置しています。約8000㎡の範囲にU字形の馬蹄状に7地点の貝塚が広がっています。これまでに多くの研究者によって発掘調査が実施されており、貝塚はヤマトシジミを主体とし、縄文時代前期～後期（約6000年～3000年前）にかけて形成されたと考えられています。また、貝塚からは住居跡や貝層から複数の人骨が確認されているほか、埋葬された状態のオジロワシ

の骨格も確認されています。

貝塚の動物遺存体

貝塚の調査では、貝層からサンプルを取り、含まれているものを調べます。サンプルには貝類を主体としてそのほかに、動物の骨、人工的につくられた土器や石器、骨角器などが確認されます。採集された遺物のうち、貝殻を含め、動物が死んだときに残る骨や鱗などを総称して、「動物遺存体」と呼んでいます。骨は本来であれば酸性の土壌によって腐朽してなくなってしまうのですが、貝類の炭酸カルシウムにより土壌が中和され、骨が腐朽せず現在まで良い状態で残ります。これらの動物遺存体を調査することにより、縄文時代の人々がどのようなものを食べ、当時はどのような環境であったのかを知ることが出来ます。

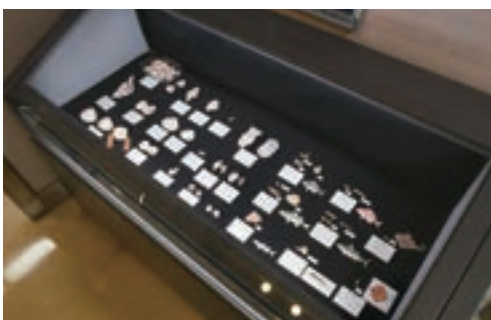
貝塚形成頃の環境

主体となるヤマトシジミは、貝層の時期によって検出される割合が変化します。一九八六年（昭和六二）に実施された発掘調査によると、第Ⅱ層ではヤマトシジミを主体とし中期末～後期初頭の土器が出土しましたが、その下の第Ⅲ層では、中期後葉の土器とともにハマグリ・オキシジミが半分を占める割合で確認されました。ヤマトシジミは淡水と海水が混じり合う汽水域の砂底で生息していま

すが、ハマグリは鹹水（海水）である内湾の砂泥底に生息しています。この出土量の割合の変化は、貝の生息する環境が変化したことを示しています。中期後葉では、三反田蜆塚貝塚の付近は、汽水域が広がりつつあったても、まだ鹹水が多く入り込んでいる状態でしたが、海退がどんどん進み、後期初頭になると汽水域がさらに広がったということがわかります。また魚骨では、水深が比較的浅い内湾の砂泥底に生息するクロダイや、産卵期には河口まで近付くスズキといった、内湾で捕ることが出来る魚が多量に検出され、貝類の生息域とほぼ同じ魚を主体として捕獲していたこともわかっていきます。このように、縄文時代にどのような環境で食料を獲得していたのかを想像することが出来るのです。

魚類	ヤマトシジミ、ハマグリ、チョウセンハマグリ、オキシジミ、オガミガイ、コタマガイ、アサリ、シオフキ、ウバガイ、オオノガイ、アワビ類、イシダタミ、ウバガイ、スガイ、ダンベイキサゴ、サザエ（類）、カワアイ、アカボラ、チリメンボラ、アカニシ、イガイ、レイシガイ、イボニシ、ミガキボラ、サトウガイ、ベンケイガイ、マガキ、イワガキ
鳥類	クロダイ、スズキ、ボラ、フグ、カツオ、マダイ、マダロ類、マイワシ、メナダ、コチ、アイナメ、カスザメ、エイ類、サメ類
哺乳類	イノシシ、ニホンジカ、ノウサギ、タヌキ、ニホンイヌ、テン、アナグマ、カワウソ、アシカ類、クジラ類、モグラ、ネズミ
爬虫類	オジロワシ、ワシ類、ハクチョウ、ウミウ、タンチョウ
両生類	カエル類

三反田蜆塚貝塚から検出された動物遺存体



展示風景

（田中美零）



今年国指定史跡になった十五郎穴横穴群には、太平洋戦争時のアメリカ軍の上陸に備えた施設が現在も残っており、これも貴重な遺構となっています。また、市内の発掘調査では、原前遺跡や大房地遺跡で、艦砲射撃による着弾跡や砲弾の破片が出土し、西塙遺跡では高射砲陣地跡を確認しています。このように、発掘調査によって太平洋戦争の爪痕を確認することがあります。

来年は太平洋戦争が終結してから八〇年と節目になる年です。今回の展示では、十五郎穴横穴群の施設や出土した高射砲陣地跡、艦砲射撃の着弾跡の写真や出土した砲弾の破片を使用し、市内に残る太平洋戦争の記憶を掘り起こしました。ここでは、その中から艦砲射撃の着弾跡についての展示内容を掲載します。

艦砲射撃による攻撃の爪痕

ひたちなか市における艦砲射撃による攻撃は、終戦間近の一九四五年七月一七～一八日に

かけて行われ、多くの犠牲者が出ました。この時の艦砲射撃は、岩手県釜石市（七月一四日、八月九日）、北海道室蘭市（七月一五日）、日立市とひたちなか市（七月一七～一八日）、静岡県浜松市（七月二九日）と、全国で五つの都市などが攻撃されました。ひたちなか市では、日立製作所や日立兵器会社などを狙った艦砲射撃が行われ、海上のアメリカ・イギリス海軍一六隻から十三分間に三六八発の砲弾が撃ち込まれ、その多くが悪天候のために目標を外れて市街地に落ち、一一〇人をこえる死者が出ました。

二〇二二年度の市内遺跡発掘調査では、勝倉地内の大房地遺跡の第二次調査で、直径約六mの円形状の攪乱を検出し、そのすぐ隣から艦砲射撃による砲弾の破片が出土しました。砲弾片の出土から、この攪乱は、着弾によりできた窪みであると推定されます。

このような艦砲射撃による着弾跡は、



艦砲射撃による着弾地点

ひたちなか市では、368発もの艦砲射撃の攻撃を受け、110人以上の死者、家屋の全焼・全壊が34戸、半壊が69戸、一部損壊が199戸との記録があります。



武田地区原前遺跡で見つかった着弾跡

一九九六年の武田遺跡群原前遺跡でも確認しています。第六号遺構としたものは、直径約六m強、深さ約一・五mの不整形を呈するすり鉢状の窪みで、古代の第四三号住居跡と重複し、その住居跡のほとんどを破壊していました。遺構から砲弾片は出土していませんが、元の土地所有者の方からこの付近に砲弾が着弾したらしいというお話を聞いていますので、この遺構は艦砲射撃が着弾した場所と考えられます。

太平洋戦争の記憶は年月とともに薄れつつあります。今回ご紹介した大房地遺跡の着弾跡と思われる遺構は、二〇二三年二月末に確認しました。このように、太平洋戦争の爪痕はまだ地面の中に眠っており、二〇二三年にこのような遺構が確認されることは、戦争の悲惨な記憶を呼び起こすきっかけだと思います、今回の展示を企画しました。

（稲田健二）

文 埋 センター の 日 々 2024 前期

4月

「特別展「ひたちなか市埋蔵文化財調査センター開館30周年記念ポスター展」終了／16 虎塚古墳石室点検／16-17 東中根清水遺跡試掘調査／20 水戸市飯富地区歴史を考える会見学／23-26 東原遺跡試掘調査

5月

「企画展「古代集落の姿」終了／8-16 西中島遺跡試掘調査／8-22 磯崎東古墳群試掘調査／二茨城キリスト教大学博物館実習実務実習」



／18-ワンケース・ミュージアム60「三反田蜷塚貝塚を探る」開始／21-29 堀口遺跡試掘調査／23 遺

跡めぐり「貝の遺跡をめぐる旅」霞ヶ浦周辺「実施」／23 茨城町歴史を語る会見学／29 中根小学校3年生見学」



6月

「ここに種をまく会火起こし体験／4-6 大和田遺跡試掘調査／7 東京国立博物館河野一隆氏遺物借用に伴う調査（乳飲み児を抱く埴輪）／11-13 大和田遺跡試掘調査／12 茨城大学出張授業「センターの活動について」／13 菅谷西小学校6年生見学」



／19-21 向坪遺跡試掘調査／19 茨城大学出張授業「虎塚古墳の保存について」／25-27 地蔵根遺跡試掘調

査

7月

2-19 下高場遺跡試掘調査／17 ワンケース・ミュージアム60「三反田蜷塚貝塚を探る」終了・ひたちなか健歩の会見学／12 市生涯学習課「らぼDEまなぼ「十五郎穴横穴群・国指定史跡への歩み」・那須塩原市公民館見学／16 十五郎穴横穴群出土遺物 茨城県指定文化財に向けての事前調査」



／17 市毛上坪遺跡試掘調査／20-ワンケース・ミュージアム61「出土した太平洋戦争の爪跡」開始／21-ふるさと考古学①「ようこそ考古学へ1」（講師：さかいひろ二氏）／23-27 大房地遺跡試掘調査／26 大平自治会ふるさと再発見講座「大平地区の古墳について」／27 ふるさと考古学②「ようこそ考古学へ2」（講師：さかいひろ二氏・海老原四郎氏・廣水一真氏）

虎塚古墳
花便り

33 ゲンノショウコ

今回ご紹介する花は、民間薬として古くから利用されている「ゲンノショウコ（現の証拠）」です。ゲンノショウコはフワロソウ科フワロソウ属の多年草で、北海道から九州に分布し、日当たりの良い山野や平地に自生しています。草丈は三〇〜五〇cmで、葉の脇から花柄を伸ばし、茎の先につく花は白色で淡紫色の筋が入ります。西日本では紅紫色の花です。花の大きさは一〜一・五cmほど小さいです。

この植物は日本三大民間薬の一つともいわれ、止瀉・整腸・健胃を目的に利用されます。薬として早く確実に効果が現れることから「現の証拠」と呼ばれています。また、花の後にできる果実は、熟すと裂開して種子を弾き飛ばし、その形が神輿の屋根に似ていることから「ミコシグサ」とも呼ばれます。薬の作用が私の体調にもっとも適したお花で、大事にしたいと思いました。

（稲田健一）



2023.10.13

／28 ふるさと考古学③「十五郎穴
入門 横穴墓っておもしろい」(講
師：助川諒氏・さかいひろこ氏)
／30 向坪遺跡試掘調査開始
／31 前渡小学校学童見学

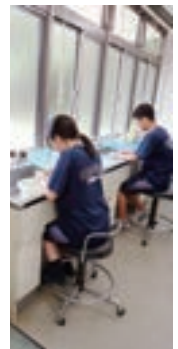


8月

「向坪遺跡試掘調査終了」／3 国
営ひたち海浜公園「勾玉づくりに
挑戦」指導／18ーみなとメディア
ミュージアム2024 関連展示開始
／20-25 博物館実習(青山学院大
学)



／21-23 職場体験(勝田中等教育
学校2年生)(下段右)
／22 インターンシップ(江戸川大
学)／24 ふるさと考古学④「遺跡
から考える戦争」講師：玉川里子



氏・さかいひろこ氏)／27-29 市
毛上坪遺跡試掘調査

9月

「みなとメディアミュージアム
2024 出展者トークショー」ゲスト
出演・関連展示終了／4 大田区立
郷土博物館資料貸出(三反田蜷塚貝塚
石鏃等)



／8 ワンケース・ミュージアム

「出土した太平洋戦争の爪跡」終
了／8-21 田彦中学校授業使用教
材貸出(縄文土器等)／13 南山大学
中尾央氏資料三次元計測(土偶)



／14 ふるさと考古学⑤「十五郎穴
を測る 地図の考古学」(講師：三
井猛氏・梅田由子氏・さかいひろ
こ氏)／18-26 市毛本郷坪遺跡試
掘調査／19 東京国立博物館資料
貸出(乳飲み児を抱く埴輪)



／22 関東古瓦研究会資料見学
[「原の寺瓦窯跡等」]／24 向坪遺跡発
掘調査開始／28 ふるさと考古学
⑥「十五郎穴のまわりの植物」(講
師：小幡和男氏・さかいひろこ
氏)・中根自治会講座「十五郎穴横
穴群国指定史跡への歩み」

入館者状況 (2024.4.1. ~ 2024.9.30)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	25	262	1 (0)	15	(0)	277
5月	27	361	4 (1)	139	(47)	500
6月	26	197	5 (1)	154	(74)	351
7月	26	214	7 (0)	174	(0)	388
8月	27	342	11 (0)	41	(0)	383
9月	25	224	4 (0)	77	(0)	301
合計	156	1600	32 (2)	600	(121)	2200

〇内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたち
なか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は「市報
ひたちなか」及び下記のホームページでお知らせします。
<https://hitachinaka-maibun.jp>

編集後記の 虎の子

二〇〇六年度からはじめて小中学生を対象
とした考古学体験講座「ふるさと考古学」は、
今年一九年目を迎えた。これまでの受講生は
三五三名で、卒業後大学で考古学を専攻する生
徒も誕生している。

講座は中学三年生までを対象としているた
め、卒業後はボランティアスタッフとして参加
してくれる人が最近増えてきた。講座を受講し
た生徒が、卒業後スタッフとして講座に関わっ
てくれる今の状況はとてもよいことで、今後も
それが続く環境を整えていきたい。また、高校
生になって講座で学んだことをさらに発展させ
てくれる生徒も現れた。高校三年生の松原彩名
さんは、「虎塚古墳を未来へ」という題名で、
二〇二四年の日本考古学協会高校生ポスター
セッションに応募し、見事に奨励賞を受賞した。
このことについては、自分のことのように嬉し
かった。

第一回目の講座で、中学三年生だった受講生
は、今年三三歳
を迎える。今
後、受講生の子
供が受講生とし
て来てくれるこ
とを、次の楽し
みにしている。



2024.5.26 ポスターの解説をする松原彩名さん



ひたちなか埋文だより 第61号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2024年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 ☎ 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ

